社会的なウェルビーイングの充実

竹中 英泰

近年よく見るようになった言葉にウェルビーイングがある。二〇二四年に武蔵野大学、二五年に藤女子大学がそれぞれウェルビーイング学部を新設している。

一九四八年にWHO（世界保健機関）は、健康について「身体的、精神的、そして社会的なウェルビーイングな状態にある」とし、貧困や衛生など生活環境面での良い状態にまで踏み込んで定義していた。その後、欧米や日本などの経済成長が進展するなかで、経済成長こそが社会の諸課題を解決するという成長神話の下で、社会的なウェルビーイングはその分後景に退く。それでも水質汚染や温室効果ガス等々生活環境の、ひいては地球環境の悪化が無視しえないようになって、社会的なウェルビーイングはふたたび前面に呼び寄せられてきた。

一九九二年のリオ・サミットは、持続可能な開発（Sustainable Development）を強調し、地球環境との両立を目指すとした。グローバル化が進展し、金融システムが肥大化するなかで発現した二〇〇八年リーマン・ショックは、リスクの巨大さや連鎖する破綻の悲惨さを広く知らしめた。二〇一一年、OECD（経済協力開発機構）は反資本主義や脱成長などの論調に手をこまねいてはいられず、ウェルビーイングとそれを考量した新たな経済指標群、GDPを補完する（Beyond GDP）指標群を打ち出した。住宅、所得、雇用、社会的なつながり、教育、環境、市民参画、健康、主観的な幸福、安全、ワークライフバランスの一一項目である。成長一本やりから社会的なウェルビーイングへの転換だ。

二〇〇〇年の国連ミレニアム・サミットは、二〇一五年までに達成すべき目標（MDGs）を以下の八つ、貧困と飢餓の撲滅、初等教育の完全普及、ジェンダー平等の推進、乳幼児死亡率の改善、妊産婦の健康、マラリア等の蔓延防止、環境の持続可能性確保、開発のためのグローバルパートナーシップの確保とした。そして迎えた二〇一五年国連総会は、一七の目標と一六九のターゲットを設定したSDGs（Sustainable Development Goals）を採択した。貧困や飢餓の撲滅だけでなく、気候変動対策、持続可能な都市の構築、平和と公正の推進などより広範な課題に取り組む。SDGsは、すべての国が責任を持って取り組むべき目標として設定され、誰一人取り残さないという理念を掲げている。

目を国内に転じると、内閣府は二〇一九年から「満足度・生活の質に関する調査」を行っている。骨太方針には、「個人と社会全体のWell-being の実現を目指す」という文言が明記されている。

二〇〇八年五月、旭川医科大学、旭川大学（現・旭川市立大学）、北海道教育大学旭川校、旭川工業高等専門学校、北海道東海大学（二〇一四年閉校）、旭川市による構成で旭川ウェルビーイング・コンソーシアムが発足した。設立の背景には国立大学法人化と市民参加のまちづくりを掲げる旭川市の姿勢がある。連携による研究・教育の向上と社会貢献を掲げ、社会的なウェルビーイングの達成を謳っての発足である。市の総合計画策定に先行する市民懇談会の運営にかかわる一方、二〇一二年の一般社団法人化後は市からの事業委託も受ける。小中高への出前授業「私の未来プロジェクト」は命の誕生をテーマとし、派遣する助産師の講話に続き、大学生が胎児人形などを使ってグループ学習をリードする。スタッフ参加の大学生にはフィールドワークとなる。連携して行う市民向けのオープンカレッジ、子供たちが科学実験等を体験するわくわくサイエンス、大学生・高専生の合同成果発表会など、学びの楽しさを共有する社会的なウェルビーイングを希求する。各大学の持ち回り開催の交流セミナーは、互いの研究マインドを刺激し合う。大学間の連携は総合大学並みの機能を生み、行政や市民も巻き込んで社会的なウェルビーイングの発現を目指している。

＜たけなか　ひでやす・旭川市立大学名誉教授＞